

ぼくたちの住んでいる宇宙の形はどうなっているのか。

宇宙に興味のある人もない人も、そんな問いを出されたらどう答えればいいのか。

現在の宇宙論の主役「インフレーション理論」では宇宙の曲率は0で、平坦な宇宙だという。

NASAの観測結果（08年3月）もそれを補強している。だが、NASAの観測の結果は「宇宙全体の形」ではなく、あくまでも観測できた局所的な宇宙の曲がり具合が平らだと言っているにすぎない。宇宙の形がほんとうはどうなのか、宇宙の外に飛び出して観察するわけにはいかなから確かなことはだれにも言えない。

そんな宇宙の形について100年以上も前にアンリ・ポアンカレという数学者が「宇宙ロケットにロープを結びつけ、ひたすら自由に宇宙空間を飛びつづけ、宇宙を一回りして戻って来たとき、宇宙にグルリと巡らされたロープが回収できたら、宇宙空間は穴や綻びがない、丸い空間である」という「ポアンカレ予想」を発表した。難しくいうと、「単連結な三次元閉多様体は三次元球面と同相と言えるか？」ということらしい。

このことを数学的に解決しようと100年もの間、大勢の数学者が苦心惨憺した。

ポアンカレ予想は「宇宙は丸い」という数式を導き出せる、としたものだが、宇宙が丸くないとすると宇宙の形はどんな形があるのだろうか、と考えた数学者がいた。

ウィリアム・サーストンという数学者で、彼は8種類の宇宙の形を提示し「幾何化予想（コンパクト3次元多様体は幾何構造を持つ8つの部分多様体に分解される）」という難問を新たに提出したりして、「宇宙の形」は紆余曲折していくのだが、結局、2002年、ロシアの数学者、グリゴリ・ペレリマンが「ポアンカレ予想」の証明をインターネットで公開して100年に及ぶ論争にケリが付いた。

宇宙が丸いという数式は $\pi_1(M) = 0 \iff M = S^3$ ということだそうだ。

昨年10月、NHKのTV番組で特集番組があり、今年6月、その番組が単行本化された。

『100年の難問はなぜ解けたのか』（NHK出版）という本だ。

グリゴリ・ペレリマンは変わり者だったらしく、4年に一度という、ノーベル賞よりも受賞が困難といわれている「フィールズ賞」をやると言われたにもかかわらず、それを拒否し、1億円の賞金も拒否し、貧困の生活に甘んじているらしい。まだ40歳なのに。

そのことについてペレリマンの働いていた研究所の会計担当者はこう言うのだ。「ペレリマンは自分の決めた行動原理を守っているだけなのです」。

あるいは、ペレリマン自身の言葉として、「自分の証明が正しければ賞は必要ない」と言っている、とか。

実際のところ、ペレリマンの証明はインターネット上にさり気なく提示されていて、最初のうちはそれがポアンカレ予想の解だと気づいた数学者はいなかったそうだ。こういう話を聞くと楽しくなる。

もう一つ、楽しい話を。

単行本の中のジョン・モーガンという数学者の話。

「数学でもっとも特別な瞬間は、問題を違った角度から眺めた時、以前見えていなかったものが突然明確になったと気づく瞬間です。鬱蒼とした森だと思っていたのに、適切な場所に自分が立つと、木が整然と並んでいるのが見えるのです。他の角度から見るとその構造は見えずに、混沌とした木だけが見えます。でも、適切な方向に自分が向くと、突然、この構造が見えます。数学とはこのようなものです。私にとってペレリマンの論文はその連続でした。私は何度も『美しい』と思いました」

これは数学の証明だけではなく、ぼくたちの日常にも適用される話ではないだろうか。注意深く「見る」ことで、世界はその注意深さに比例して存在する。

『はみがきおじさん／らっぱ男』の快感原則

ヤマモトリツコさんの新しい詩集『はみがきおじさん／らっぱ男』（土曜美術社出版販売）は次のような短かい詩からはじまる。

はみがきおじさんが自転車に乗って

青い空を走ってゆく

夕方

ピンク色の空に

すうっと消えていった

（「はみがきおじさん」全篇）

自転車に乗ってピンクの空に消えていったおじさんの行方を「楽観視」している読者は、このあと、次から次と繰り出される混濁と錯綜の世界をどう泳ぎ切ってこの一冊の本を閉じなければならぬのか。そしてその混濁と錯綜とおもっている世界が実はなにげなく繰り広げられている

日々の暮らしのことだと、気づかされてしまったあと、その世界とどう向き合っていくのか、そのとき、はじめて、混濁と錯綜の世界にまぎれ込んでしまうしかない、のだが。

子供をひとり殺してきた
やはり私の顔をした子供だった
川に投げ捨てると生き返った
ずるずると這い上がってきてすそをつかむ
気に入らないので
もう一度川につっこんでおぼれさせてやる
うつぶせにおしりを浮かせて
頭からぷかぷかと流れていった
上機嫌になって土手を降りてゆくと
自転車にまたがった子供が見上げてきた
傍らに小さい子が二人草をむしって
くすくすとささやきあっている
横を通り過ぎるときにちらと見ると
ぴたと静まった

いずれも顔がなかった

(「顔」全篇)

からすに目玉を食べられた
おいしい目玉を食べられた
黄色い眼窩に風がふく
からすに目玉を食べられた
青い目玉も食べられた
がらんどうの両目から
風に吹かれて乾いた脳が
さらさらこぼれてなくなった

(「からすと目玉」全篇)

その夜彼女は耳を獲られてしまっていたので
代わりに僕の口をとりあげた
僕の口はそっと彼女の手のひらにおさまり
ゆっくりと口を動かして彼女の指に話し掛ける
彼女が繰り返す言葉を耳を振って確認しながら

一方通行の会話は遅々として進まず

口の代わりに耳を片方貸してあげればよかったと思ひながら

二人の夜は明けてしまい

僕は耳のない彼女を残して

夜明けの道で大きく口から息を吸い込んで

さよならを言った

〔「耳」全篇〕

このようにヤマモトさんの詩は、不安や不安定、不条理をひよいと背中に背負った自我崩壊への誘惑、といった陰画性が顕著だ。それと同時に、ヤマモトさんの吃音がなだらかに聞こえている、のも彼女の詩の特長だ。それは、吃音であることを意に介していないために、誰の耳にも吃音と聞こえないためだが、彼女はほんとうは吃音なのだ。(どうして、言葉にむかつたとき、吃音しないでいられるだろう。なめらかに自分の人生を語る人を信用していいのだろうか)

その吃音のなかで彼女は、自分の悪夢を断言している。断言することで了解できる自分が見えてくる、とでもおもっているかのように。残酷で、卑猥で、自虐的な自分を自分自身に了解させるかのように。(了解させなければ、こんな世間、どう生きていっていいのかわからないではないか)

でも、それが「悪夢」であるかどうか。「夢」の形をした「現実」かもしれないし、「悪」を見せびらかしているだけの「善」かもしれないし。

そういう自分に耐えながら、ヤマモトさんは、ヤマモトリツコという意味性をひよいと剥離できたらいいな、と願っているような気がするが、どうだろう。

私は私でいたくない。「いずれも顔がなかった」し、「風に吹かれて乾いた脳がさらさらこぼれてなくなつて」、「さよならを言った」のだから。もう、ひよいと消えてもいいではないか。

現実感の領域から言葉をそらすことは、彼女自身の現実感の喪失を彼女自身が了解しながら、生きていくことに繋がるのではないかと。

フロイトは、人間は「欲動」にとらわれている、と言っている。

また欲動には生の欲動と死の欲動の二種類があり、その中にも、無意識的な思考(一次過程)があり、それは非言語的、非倫理的な思考であり、より原始的で根源的な心の働きである、と。

そのような無意識の欲望が先行しはじめるとヒトは、道徳的な自我(超自我)が無意識を諫める。そうすることで、ヒトはバランスよく社会に適合して生きていけるのだ、と。

しかし、ヤマモトさんは無意識の欲望の露見を怖れない人だ。そういう生き方を選択している、というよりも、無意識のうちにそういう生き方を選ばされている、といえる。

おまけに彼女がとらわれているのは「死の欲動」のほうだからやっかいだ。

その上、その「死の欲動」は反復強迫(Ⅱ)とえそれが苦痛なことでも何度も繰り返さずにはおれない)を繰り返すことで、より強固になり、後戻りすらできなくなってしまう。より言えば、「死の欲動」なしには彼女の「生の欲動」はありえないのだ。

以前ヤマモトさんは、「胎児というのは自分の腹を食い破って出てくる敵」と言っていたことがある。ぼくなど男にはよくわからないことだが、女の人は新たな生命を育むことに喜びを感じる人と、ヤマモトさんのように違和感を持つ人がいるのだろうか。それにしても「自分の腹を食い破って出てくる敵」は尋常ではない。この尋常ではない思いはどこから生まれたのだろうか。

自分自身の肉体に感じている違和感。消去への欲望。そんな自分が新たな生命を宿すことへの唾棄感。でも、それだけでは説明できないことである。フロイト先生なら、幼児期の性的体験を元に見事な分析をおこなうかもしれないが、単なる読者であるぼくは、ヤマモトリツコという「違和感」を媒介に、作者との添い寝を楽しみたい、という欲望にとらわれるだけでいい、とおもってしまう。もしかしたらぼくという読者はヤマモトリツコに「逆転移」する快感を求めているのかもしれない、と。

でもそれは、論理的な言い方ではなく、ヤマモトさんとの親和力を背景にしただけの感傷的な産物ともいえる言い分だから、ヤマモトさんの違和感の源泉を探りあてる行為とは別の話で、フロイト先生には鼻の先で笑われてしまったぐいの話ではあるが、それでもぼくは、ひそかに、ヒトは、無意識のうちに断念している夢を、他者の夢のなかに見ることがないとはいえない、とおもっている。だれにも証明できないことではあるが。

ヤマモトさんの自分自身への違和感を告白している詩が次の詩である。

身体の飢えと心の飢えの見分けがつかなくなり

ポツカリと空いた心の隙間に食いものをガツガツとあてがってみても

腹ばかりが意味もなく膨れて一向に満たされてこない

身体が重くなるにつれ飢餓感は増してゆき

それと気付いたときには心から風が吹く肉の塊と化して

肉を削ぎ落としたのか満たされたいのかすらもはや見分けもつかず

部屋の隅におき場のない身を精一杯ちぢこませて

時間だけに寄りかかって耐えていても

畳に溶け出したよんだ身体が腐ってゆくばかりで

諦めるといより呆れた心地で

裸れようと水ばかり飲んだぼっこりと腹の出た稚魚のような女が

真つ暗い顔を浮かべてのっそりとろろついている部屋で

ひとごとのように目をぎらつかせて何かを待ち望んでいる

飢えた視線を漂わせてどうしたものかと肉の重さにつぶされかかって

ついに物が考えられなくなり心は砂のようにさらさらと吹かれて消えてしま

どろどろとよんだ部屋だか女だか脂肪だかわけのわからないうつつうしいものが

私の存在なのだ愕然としながら抵抗の機会すらも失って

違和感をなだめすかして生きていくのはつらいものがある。どこを探しても「あり得べき自分」など存在しないのだ。「あり得べき自分」という幻想すら持ち得ないのだ。

それでも世間は関係を持つとと迫ってくる。まるで、精神分析医のように、ヤマモトさんの持つている齟齬を言葉で解析してやる、とでも言いたそうに。「抑圧」している心の真実を顕在化させてやるとでも言いたそうに。

そんな詐欺に引つかかるようなヤマモトさんではない。

ここまできたら彼女の原抑圧がなんなのか。それはどうでもいいことのようにおもえる。

などと、かつてに語ってきたが、この一冊を読み終えておもうことは、ヤマモトさんは、自分を断念した自分を受け入れている自分を知ること、そういう自分を気持ち悪いとおもいながらも、ひよいと消去されたい、と願いながらも、そんな自分を完全に断念できないのはなぜだろう、と自分自身を不思議におもっているのではないだろうか、ということだ。

だから、ヒトが生きているということは、そんな優柔不断を生きていることだとおもうのだが、と優柔不断な書き方をして終わりたいとおもう。